

<p>I. 使徒行伝は、天におられる復活し昇天したキリストを啓示しています： 使徒 1:3 イエスは苦難を受けた後、ご自分が生きておられることを、多くの確かな証拠によって彼らに示し、四十日にわたって現れ、神の王国についての事柄を語られた。使徒 1:9 イエスはこれらの事を言い終えると、彼らが見ている間に引き上げられ、雲が彼らの視界から彼を連れ去った。</p>	<p>A. 天における主の生活と務めは、使徒行伝の内容です。</p>			
	<p>B. 主の昇天は、彼が天における彼の生活と務めを開始することでした： 使徒 5:30 私たちの父祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスを、復活させました。31 この方を、神は元首また救い主としてご自身の右に引き上げ、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えてくださいました。</p>		<p>1. この開始は、彼を新しい領域の中へともたらし、すなわち天の中へともたしました。今、彼は天で彼の生活と務めを持っています。 2. 使徒行伝は、復活し昇天したキリストが今や、天で生きており、そこで務めをしていることを啓示しています。</p>	
	<p>C. キリストの昇天は、神が彼を引き上げることでした： 使徒 2:36 こういうわけで、イスラエルの全家は、確かに知っておきなさい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は主またキリストとされたのです」。</p>	<p>1. 主は主、すなわち万民の主とされて、万物を所有しました。また彼はキリスト、すなわち神の油塗られた者とされて、神の使命を遂行しています： ヘブル 1:9 あなたは義を愛し、不法を憎まれます。それゆえに神、あなたの神は、歓喜の油を、あなたのパートナーにまさって、あなたに塗られました」と言われます。</p>	<p>a. 主は神として、絶えず主でした。しかし人としては、復活において彼の人性を神の中へともたした後、昇天において主とされました。ルカ 1:43 私の主の母君が、私の所に来られるとは、どうしたことでしょう？ b. 彼は神の遣わされ油塗られた方として、生まれた時からキリストでした。しかしそのような方として、彼はまた昇天において正式に神のキリストとされました。 ルカ 2:11 今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。その方こそ、主なるキリストである。マタイ 16:16 シモン・ペテロが答えて言った、「あなたはキリスト、生ける神の子です」。 ヨハネ 1:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシア(訳せばキリストを意味する)に出会った」と言った。</p>	
		<p>2. 神はキリストを「元首また救い主としてご自身の右に」引き上げました：</p>	<p>a. 昇天したキリストは元首、開始者、創始者、発起人です： ヘブル 12:2 私たちの信仰の創始者、また完成者であるイエスを、ひたすら見つめていなさい。彼はご自分の前に置かれた喜びのために、恥をもちとわなないで十字架を耐え忍び、そして神の御座の右に座しておられるのです。</p>	<p>(1) 彼が元首であることは、彼の権威と関係がある事柄です。 マタイ 28:18 イエスは来て、彼らに語って言われた、「天においても地においても、いっさいの権威が私に与えられている。 (2) 彼はご自身の権威を用いて主権を持って地を支配し、神の選ばれた民が彼の救いを受けられるように、環境を案配します。 使徒 17:26 また彼は、一人からあらゆる国民を造り、地の全面に住まわせ、予定された時季と居住の境界を定められました。27 それは、彼らに神を求めさせるためであり、また彼らが神を捜し求めさえすれば、神を見いだすことができるためです。確かに神は、私たち一人一人から、遠く離れておられるのではありません。(第一日目)</p>
	<p>b. 神が彼の右に引き上げた方は、救い主でもあります：</p>	<p>(1) イエスの肉体と成ることは彼を人と成らせ、彼の人の生活は、彼が人の救い主となるよう資格づけ、彼が十字架につけられることは、人のために完全な贖いを成就し、彼の復活は彼の贖いの働きを立証し、彼が引き上げられることは、彼を支配する元首として就任させ、彼が救い主となるようにしました。 (2) 私たちは、御座の上のキリストによって、栄光の中にある方によって救われました：エペソ 1:20 神は、その力強い大能をキリストの内に働かせて、彼を死人の中から復活させ、彼を天上でご自身の右に座らせ、21 すべての支配、権威、力、主権、そしてこの時代ばかりではなく、来たるべき時代においても唱えられるあらゆる名を超えて、はるかに高くされました</p>	<p>(a) 私たちは救われた時、彼と共に天上に座らせられました。エペソ 2:6 キリスト・イエスの中で、私たちを彼と共に復活させ、彼と共に天上で座らせてくださいました。 (b) キリストは御座から私たちを救い、御座へと至らせました。これは私たちの救い主としての昇天したキリストです。</p>	

<p>II. 私たちは昇天したキリストの天の務めと協力して、復活したキリストを増殖させるために、使徒行伝の内在的な意義を知る必要があります：</p>	<p>A. 使徒行伝は、キリストと共に復活し昇天した一組の人々の記録であり、彼らはキリストを彼らの内側に命として持ち、キリストが彼らの上で力また権威となっています。彼らは内側にある命としての三一の神によって生き、彼らの上にある強さ、力、権威としての三一の神によって活動します。 ヨハネ 20:22 彼はこう言って、彼らの中に息を吹き込んで言われた、「聖霊を受けよ。 ルカ 24:49 見よ、私は私の父が約束されたものを、あなたがたの上に送る。ただ、あなたがたは、高い所から力を着せられるまで、都にとどまっていなさい」。(第二日目)</p>	
	<p>B. 使徒行伝は、からだの中で、からだを通して、からだのために活動し働く一組の人々の記録です： 使徒 1:14 これらの人はみな、婦人たち、イエスの母マリア、イエスの兄弟たちと共に、一つ思いでひたすら祈り続けていた。</p>	
	<p>C. 使徒行伝は、神聖な水流、唯一の流れを見せています。そこにはただ一つの水流、ただ一つの流れしかありません。 啓 22:1 また御使いは、水晶のように輝く命の水の川を私に見せた。それは神と小羊の御座から、大通りの中央を流れていた。</p>	
	<p>D. 使徒行伝には一組の人々がいます。彼らは、復活と昇天の意義を知っており、彼らの命としてのキリストによって生き、彼らの力また権威としてのキリストによって活動し、自分がからだであり、からだの中で、からだのために、一つの神聖な水流の中で活動していることを認識しています。これが、使徒行伝の内在的な意義です。 使徒 4:33 使徒たちは大いなる力をもって、主イエスの復活の証しをした。そして、大いなる恵みがすべての者の上にあった。(第三日目)</p>	

<p>III. 昇天したキリストは、彼の天の務めを完成して、ご自身を増殖させ、神の王国が確立されて、彼の豊満としての諸召会を建造するために、一団の証し人を用います。それは、人の教えによって訓練された一組の伝道者を用いて、伝道の働きを行なわせるものではありません。一団の証し人は、肉体と成り、十字架につけられ、復活し、昇天したキリストの生ける証しを担っています： <u>使徒 1:8</u> しかし、<u>聖霊</u>があなたがたの上に臨む時、あなたがたは力を受け、そしてエルサレムにおいても、ユダヤ全土とサマリアにおいても、また地の果てまでも、私の証し人となる。</p>	<p>A. 使徒行伝で記録されているように、主が彼の昇天において、天における彼の務めを完成するのは、これらの証し人を通してです。彼らは彼の復活の命の中にあり、彼の昇天の力と権威を帯びており、彼ご自身を拡大させて、神の王国の発展とならせ、エルサレムから開始して、地の果てにまで至ります：</p> <p>B. 主の復活は、使徒たちの証しの中心点でした： <u>使徒 1:22</u> すなわちヨハネのバプテスマに始まり、主が私たちを離れて上げられた日まで、常に共にいた人たちの一人が、私たちと共にイエスの復活の証し人となるべきです」。(第四日目)</p>	<p>1. 証しすることは、主や霊的な事物について、見て享受するという経験を必要とします。それは単に教えることとは異なります。 <u>使徒 2:40</u> ペテロはほかにも多くの言で厳かに証しをし、彼らに勧めて、「この曲がった世代から救われなさい」と言った。</p> <p>2. パウロは、奉仕者また証し人として定められました： <u>使徒 26:16</u> 起き上がって、あなたの足で立ちなさい。私があるに現れたのは、私を見た事と、私があるに現そうとしている事について、あなたを奉仕者、証し人として定めるためである。</p>	<p>a. 奉仕者は務めのためであり、証し人は証しのためです。</p> <p>b. 務めはおもに働きと関係があり、奉仕者が行なうことと関係があります。証しは人と関係があり、証し人が何であるかと関係があります。</p>
<p>IV. 私たちが昇天したキリストと協力して、復活したキリストを増殖させることは、命における行動であり、福音を広めるためです： <u>使徒 10:1</u> さて、カイザリヤにコルネリオという名の人があった。イタリア歩兵隊と呼ばれる部隊の百人隊長であって、<u>2</u> 信心深く、彼の全家と共に神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈り求めていた。<u>3</u> ある日の第九時ごろ、彼は、神の御使いが彼の所に来て、「コルネリオよ」と言うのを、ビジョンの中ではっきりと見た。 <u>9</u> 翌日、この人たちが旅をして、その町に近づいていた時、ペテロは第六時ごろ、祈るために屋上に上がった。<u>10</u> ペテロは非常に空腹になって、食事をしたいと思った。そして人々が用意している間に、彼は夢心地になった。<u>11</u> すると、天が開けて、大きなシーツのような入れ物が、四隅を吊るされて、地に下って来るのを見た。<u>12</u> その中には、あらゆる四つ足の動物、地の這うもの、空の鳥が入っていた。<u>13</u> そして声が彼に臨んだ、「ペテロよ、立ち上がりなさい。殺して食べなさい！」。<u>14</u> しかしペテロは言った、「主よ、それはできません。私は俗な物や汚れた物を、一度も食べたことがないからです」。<u>15</u> するとまた、声が彼に二度目にあった、「神が清めた物を、俗なものとしてはならない」。<u>16</u> こういうことが三度起こってから、直ちにその入れ物は天に引き上げられた。<u>17</u> さて、ペテロは、今見たビジョンは何のことなのかと戸惑っていた。すると、見よ、コルネリオから遣わされた人たちが、シモンの家を探ね当て、その戸口に立った。<u>18</u> そして叫んで、ペテロと呼ばれるシモンがここに泊まっておられるかと尋ねた。<u>19</u> ペテロがそのビジョンについて思いめぐらしていると、その霊は彼に言われた、「見よ、三人の人があなたを尋ねて来ている。<u>20</u> さあ、立ち上がり、下りて行き、何も疑うことなく彼らと一緒に行きなさい。私が彼らを遣わしたのである」。<u>21</u> ペテロはその人たちの所を下りて行って言った、「見なさい。あなたがたが尋ねているのは、私です。あなたがたが来られたのは、何のためですか？」。<u>22</u> すると彼らは言った、「百人隊長コルネリオは義たしい人で、神を畏れ、ユダヤの全国民に称賛されている人ですが、あなたを家に招いて、言葉を聞くようにと、聖なる御使いによって示されました」。</p>	<p>1. 神は彼のしもペイエスの復活を通して、また彼の昇天において、彼の栄光を現しました。 <u>使徒 3:13</u> アブラハム、イサク、ヤコブの神、私たちの父祖の神は、彼のしもペイエスに栄光を与えられました。あなたがたはその方を引き渡して、ピラトが釈放することを決めていたのに、彼の面前で拒否しました。 <u>15</u> あなたがたはあの命の創始者を殺しましたが、神は彼を死人の中から復活させました。私たちは、そのことの証し人です。</p> <p>2. 主イエスの復活は、彼の肉体と成ること、人性、地上での人の生活、神の定められた死を、後に戻って指し示します。また彼の復活は、彼の昇天、天における務めと行政、再来を、前に向かって指し示します。<u>使徒 2:23</u> 神の定められた決議と予知によって引き渡されたこの人を、あなたがたは不法の者たちの手によって、十字架に釘づけて殺してしまったのです。</p> <p>3. 主は神であり、また復活でもあり、不朽の命を所有しています： <u>ヨハネ 1:1</u> 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 <u>ヨハネ 11:25</u> イエスは彼女に言われた、「私は復活であり、命である。私の中へと信じる者は、たとえ死んでも生きる。 <u>ヘブル 7:16</u> この方は、肉の戒めの律法にしたがってではなく、不朽の命の力にしたがって立てられたのです。</p> <p>4. 使徒たちが復活したキリストの証し人であったのは、ただ言葉においてだけでなく、彼らの生活と活動によってでもあり、特に彼の復活の証しを担っていました。キリストの復活の証しを担うことは、神の新約エコノミーを完成することでの重点、中心点です。 <u>使徒 2:32</u> このイエスを、神は復活させました。私たちはみな、そのことの証し人です。(第五日目)</p>	<p>3. 主は神であり、また復活でもあり、不朽の命を所有しています： <u>ヨハネ 1:1</u> 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 <u>ヨハネ 11:25</u> イエスは彼女に言われた、「私は復活であり、命である。私の中へと信じる者は、たとえ死んでも生きる。 <u>ヘブル 7:16</u> この方は、肉の戒めの律法にしたがってではなく、不朽の命の力にしたがって立てられたのです。</p> <p>4. 使徒たちが復活したキリストの証し人であったのは、ただ言葉においてだけでなく、彼らの生活と活動によってでもあり、特に彼の復活の証しを担っていました。キリストの復活の証しを担うことは、神の新約エコノミーを完成することでの重点、中心点です。 <u>使徒 2:32</u> このイエスを、神は復活させました。私たちはみな、そのことの証し人です。(第五日目)</p>	<p>a. 彼はそのようにいつまでも生きている方であるので、死は彼をとどめることができません。</p> <p>b. 彼はご自身を死に渡しましたが、死は彼を捕まえるすべがありませんでした。むしろ、死は彼によって打ち破られ、彼は死から復活しました。<u>啓 1:18</u> また生きている者である。私は死んだが、見よ、永遠にわたって生きている。そして、死とハデス[陰府]のかぎを持っている。</p> <p>A. この命における行動は、主の昇天における天の務めと協調しています。</p> <p>B. 使徒第8章、第9章、第10章において、主は外側で彼の弟子たちを動かして、福音を宣べ伝えさせました。彼は天で務めをして、彼の弟子の何人かを感動させていました：</p> <p>C. これは、キリストの天の務めの下にある、命における行動としての、正しい福音の宣べ伝えです： <u>使徒 5:42</u> そして毎日、宮の中で、また家から家で教え、イエスがキリストであるとの福音を宣べ伝えてやまなかった。</p> <p>1. ピリポは主の天の務めに応答して、エルサレムを離れてガザへ行きました(8:26)。これはピリポの側での協調であり、命において行動して福音を広めました。</p> <p>2. 使徒第9章には驚くべき三者の関係があり、キリストは天において務めをし、アナニヤとサウロは地上でそれに協調しました。</p> <p>3. 使徒第10章において、ペテロは主と協力して異邦人に福音を宣べ伝えました。</p> <p>1. キリストはかしらとして彼の頭首権を行使して、至る所で彼の弟子たちを動かしました。彼らは油断せずに、彼の天からの務めに応答しました。</p> <p>2. 主の回復の中の福音の宣べ伝えはこのようであるべきです。すなわち、命における勝利を得る行動であり、キリストの頭首権の下で、彼の天の務めに協調することであるべきです。 <u>使徒 13:1</u> さて、アンテオケの地に在る召会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどの、預言者たちと教える者たちがいた。<u>2</u> 彼らが主に仕え、断食していた時、聖霊が言われた、「さあ、バルナバとサウロを私のために選び分け、私が彼らを召した働きに当たらせなさい」。<u>3</u> そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。<u>4</u> 二人は聖霊によって遣わされ、セルキヤに下りて行き、そこから船でクプロに渡った。(第六日目)</p>

経験:①クリスチャンは、内側は命の霊で、外側は権威の霊で満たされる

使徒行伝は、キリストと共に復活し昇天した一組の人々の記録であり、彼らはキリストを彼らの内側に命として持ち、キリストが彼らの上で力また権威となっています。彼らは自分自身によってではなく、命としてのキリストによって生きます。彼らは自分自身の命を忘れて、自分自身を否みます。さらに、彼らは自分自身の力、自分自身の方法、あるいは自分自身の手段によってではなく、彼らの力、方法、手段としてキリストによって歩き、活動し、働きます。今や彼らの手段、方法、力であるこのキリストは、彼らの上にと下った聖霊です。言い換えると、彼らは内側にある命としての三一の神によって生き、彼らの上にある強さ、方法、手段としての三一の神によって活動します。これが使徒行伝の内容です。私たちは主の復活と昇天の意義を、復活の日に主の息を吹き込んだことと、ペンテコステの日に激しい風が吹いたことの両方を含めて、認識しなければなりません。今や私たちの内側には息があり、私たちの上には激しく吹いている風があります。私たちは内側に三一の神を命として持っており、その同じ三一の神を外側に権威として持っています。そのような者として、私たちは召会です。

使徒行伝第2章でエルサレムから始まって、この地上にはただ一つの流れしかありませんでした。初期の弟子たちはみな、その流れの中で行動し、活動し、働きました。流れには二つの水流はなく、常に一つの水流でした。主によって起こされた人たちはみな、遅かれ早かれ、その流れの中へともたらされました。…さらに、使徒たちは、自分たちがからだであることを認識し、常にからだの中で、からだのために一つの神聖な水流の中で活動します。私たちがみな、復活と昇天を知るだけでなく、自分自身によってではなく、からだの中で、からだのために、一つの流れの中で、復活の中で生き、昇天の中で活動する程度にまではっきりしますように。これが、使徒行伝の真の意義です。

在職青年 & 中高生編

クリスチャンであるあなたは、内側に命の霊があります。この霊はあなたの内側で命であり、喜び、知恵の源です。また、外側には力と権威の霊があなたを覆っています。この霊は、警官の制服のように、あなたの外側を覆い、あなたの活動のために、権威、強さ、方法、手段を提供します。警官は、制服を着ていなければ路上で笛を吹いて走行中の車に指示をしても誰も相手にしません。しかし、同じ人が制服を着て笛を吹くと、その権威のゆえに人々は皆、警官に従います。同じように、あなたは天的制服である力と権威の霊を外側に着ているのです。悪魔サタン、邪悪な霊、悪鬼どもは皆このことを知っており、クリスチャンを非常に恐れています。しかしながら権威の霊を着る前に、あなたはまず命の霊で内側が生かされている生きた人でなければなりません。死んだ人に制服を着せても意味がないからです。

在職青年であれ、大学生であれ、中高生であれ、あなたは自分が誰であるかを神の言葉と信仰によって、正確に認識する必要があります。神の言葉と信仰によってというのは、あなたの天然の感覚や希望によってではないという意味です。人の感覚は周りの環境や自分の状態によって変わり得ます。しかし神の言葉は変わりません。神の言葉を読み、自分の霊と信仰を活用して御言葉を受け入れてください。

I ペテロ 1:24 なぜなら、「すべての肉は草のようで、その栄光はすべて草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25 しかし、主の言葉は永遠に存続する」。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられた言葉です。

あなたは会社や学校でイエスの証し人として、リーダーになるために再生され、神の子供、キリストの兄弟、キリストのからだの肢体になったことを認識してください。またあなたは、内側は命の霊で満たされ、外側は権威の霊で満たされているという素晴らしい卓越した事実をはっきり知る必要があります。あなたは決して自分の感覚に従って、自分を卑下したり、あるいは高ぶったりしてはいけません。天然的にへりくだって、「自分はダメな人だ」と言うてはいけません。他方、あなたがリーダーになると言っても、からだの肢体ですので、キリストと召会を離れてリーダーになるということではありません。へりくだってからだの中で自分の分を果たすべきです。アーメン!

経験:②召会は、キリストの天の務めの下で、福音を宣べ伝える

ピリポは主の天の務めに応答して、エルサレムを離れてガザへ行きました(使徒 8:26)。彼は荒野を歩いている間、天のキリストに応答していました。主は感動させることができる一人の弟子を、その荒野に持っておられたのです。彼がピリポに「近づいて、あの馬車と一緒にになりなさい」(29 節)と言われたとき、ピリポは走り寄って、その宦官がイザヤ書を読んでいるのを聞きました。あなたは、ピリポがいかにかの天の務めと協調していたかを見るでしょうか? これを通して、エチオピアの宦官は主にもたらされたのです。これはピリポの側での協調であり、命において行動して福音を広めました。

使徒行伝第9章での状況は似ていました。ビジョンが天から臨んだとき、アナニヤは祈っていたに違いありません。主は天の影像を通して彼に語り、そして彼をサウロに向かわせました。天の影像の伝達が臨んだとき、サウロも祈っており、アナニヤが来るのを見ました。驚くべき三者の関係があり、キリストは天において務めをし、アナニヤとサウロは地上でそれに協調して、すべてはサウロを主にもたらすことを目指しました。

使徒行伝第10章では、コルネリオと名づけられたローマの百人隊長が祈っており、その時、御使いが来てペテロに人を遣わすよう彼に告げました。…彼は彼らと共に行き、コルネリオと彼の家族、そしておそらく兵卒たちも、みな主にもたらされました。

これは正しい福音の宣べ伝えです。それは、キリストの天の務めの下にある、命における行動です。それは外国伝道本部によって組織された運動ではありません。キリストはかしらとして彼の頭首権を行使して、至る所で彼の弟子たちを動かしました。そして彼らは油断せず、彼の天からの務めに応答しました。回復の中の福音の宣べ伝えがこのようであること、すなわち、命における勝利を得る行動であり、主の頭首権の下で、彼の天の務めに協調することを、私は望みます。

奉仕(福音の宣べ伝え)編:

神戸に在る召会は、2017年上半期(Q1-2)で32名バプテスマすることができました。主よ、賛美します。以前には、最大で年間184名バプテスマしたこともありましたが、神戸の度量(主日人数125~145名)では、そんなに多くの人を顧みることができません。何年も100名以上の人をバプテスマしてきたことは、ニュー・ウェイの第一歩、「生む」ことでの大きな前進であり、日本において福音の突破口を開くという重要な意義があったと言えます。

ニュー・ウェイの第二歩は、「牧養」です。一方で、質は量から来るので、ある程度の量が無ければ、良い器を得ることが期待できません。他方、神戸の牧養の度量から考えると、年間に60~80名ぐらゐのバプテスマ人数を得ることが適当であると考えています。下半期(Q3-4)も30名以上の平安の子をバプテスマすることができますように。

日本において、福音は徐々に伝えやすくなっているとは言え、日本は、この世の君、サタンの支配力が非常に強い国、典型的なサタンの王国です。私たちはからだの中で霊的な戦いを戦うため、一つ霊と一つ思いで戦う祈りをする必要があります。「主イエスよ、日本において以前よりサタンの支配が弱くなっています。召会は福音を伝えることでさらにサタンを辱めます」。

エペソ 6:10 最後に、主の中で、また彼の力強い大能の中で力づけられなさい。11 神のすべての武具を身につけなさい。悪魔の策略に敵対して立つことができるためです。12 というのは、私たちの格闘は血肉に敵対するものではなく、支配者たちに、権威者たちに、この暗やみの世の主権者たちに、天上にいるあの悪の霊の勢力に、敵対するものだからです。

ピリポ 1:27 あなたがたが一つ霊の中でしっかりと立ち、一つ魂をもって、福音の信仰と共に奮闘しており、

からだのかしらであるキリストは、彼の天の務めの中で福音の宣べ伝えのために活動しており、私たち、からだの肢体に感覚を与え、指示します。私たちは福音の宣べ伝えが、キリストの天の務めに呼応する働きであり、からだの中の働きであることをはっきりと認識する必要があります。ハレルヤ!

ヨハネ 10 章のマイルストーン: 宗教の中の盲人の必要—命の牧養

By 神大 BSG OB/OG

ヨハネ 10:1 「まことに、まことに、私はあなたがたに言う。羊の囲いに門を通過して入らないで、他の所を乗り越えて来る者は、盗人であり強盗である。2 しかし、門を通過して入る者は、羊の牧者である。3 門番は彼に開き、羊は彼の声を聞く。彼は自分の羊の名を呼んで、彼らを導き出す。4 彼が自分のものをみな出すと、彼らに先立って行く。羊は彼の声を知っている。5 しかし、見知らぬ者には決して従わないで、彼から逃げ去る。それは、見知らぬ者の声を知らないからである。」

7 そこで、イエスは再び彼らに言われた、「まことに、まことに、私はあなたがたに言う。私は羊の門である。8 私より前に来た者はみな、盗人であり強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9 私は門である。だれでも私を通過して入る者は救われ、また入ったり出たりして、牧場を見いだす。」

10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。私が来たのは、羊が命を得、しかも豊かに得るためである。11 私は良い牧者である。良い牧者は羊のために自分の命を捨てる。12 雇われていて、牧者ではなく、羊が自分のものではない者は、おおかみが来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げ去る。おおかみは羊を奪い、また追い散らす。13 彼が逃げ去るのは、彼が雇われた者であって、羊のことを顧みないからである。14 私は良い牧者である。私は私のものを知っており、私のものは私を知っている。

16 また私には、この囲いのものではない他の羊もいる。私は彼らをも導かなければならない。彼らは私の声を聞く。こうして一つの群れ、ひとりの牧者となる。

1 節の羊の囲いは、律法、あるいは律法の宗教としてのユダヤ教を象徴します。キリストが来られるまでは、神の選びの民は其中で保たれ、後見の下で守られていました。このことは原則において私たちも同じです。人は成長してある程度の年齢(中学生頃)になると、自分の意志で主を選び、主を信じることができます。しかし、それまでは適切な成長を持つため、文化の中で保護される必要があります。ユダヤ人の場合はユダヤ教の律法がその保護であり、日本人にとっては日本の文化が保護となります。日本人は日本の文化に従った躰、礼儀、常識などによって育てられる必要があります。そうでないと動物のような野蛮な人になってしまい、社会生活を送ることが困難になります。

続けて 1 節の羊の囲いの門は、主イエスです。羊の群れは夜の間、囲いの中で守られなければなりません。しかし昼間は囲いから出て、緑の牧場に行き、小川の新鮮な水や、緑の牧草を享受する必要があります。

もし宇宙に主イエスがおられないなら、人は囲いから出て牧場に行き、享受することができません。しかし、神に感謝します。彼は一つの門を確立されました。それは主イエスです。主イエスは、一方で十字架上で血を流し人の罪を担い、神と人との間の罪の障害物を取り除かれました。他方、彼は彼の命を解き放ち、命を人の中に分け与えました。主の血と主の命によって、主は門となりました。人はこの門を通過して神の命の豊富な享受の中に入ることができます。

キリストは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロなどの神の選びの民が、キリストの来られた後、律法の囲いから出て来るための門です。あなたも門であるキリストを通過して、文化の囲いから出て、緑の牧場の享受の中に入ることができるのです。9 章で、見えるようになった盲人も、この羊です。彼は主によってユダヤ教の囲いから連れ出されました。ですから、この章は第 9 章の連続です。

9 節の牧場は、羊を養う場所としてのキリストを象徴します。牧場が利用できない時(例えば、冬の期間や夜間)には、羊は囲いの中で守られなければなりません。牧場の用意ができると、羊はもはや囲いの中にとどまっている必要はありません。囲いの中に保たれているのは過渡的であり、一時的です。牧場において、その豊富を享受することは最終的であり、永久です。

キリストが来られる前は、律法は後見人であって、律法の下にいることは過渡的でした。今や、キリストが来られたからには、神の選びの民はみな律法から出て、彼の中に入り、彼を彼らの牧場として享受しなければなりません。これは最終的であり、永久であるべきです。

主は良い牧者であり、羊であるあなたの名を呼んで、あなたを囲いから牧場へ導き出します。牧者の親密で、甘い語りかけに感謝します！10 節は、「私が来たのは、羊が命を得、しかも豊かに得るためである」と言います。この「命」のギリシャ語は「ゾーエ(zoe)」であり、新約では永遠の、神聖な命に用いられています。11 節の「命」のギリシャ語は「シューケ(psuche)」であり、魂、魂の命を意味します。主は人として、シューケの命、人の命を持っておられ、神として、ゾーエの命、神聖な命を持っておられます。彼はご自身の魂、シューケの命、人の命を捨てて、彼の羊のために贖いを達成されました。それは、彼らが彼のゾーエの命、彼の神聖な命、永遠の命にあずかり、それによって一人の牧者である主ご自身の下で、一つの群れへと形成されるためです。良い牧者として、主はこのようにして、またこの目的で、神聖な命をもって彼の羊を養われます。

人々は幼い時、それぞれの文化や宗教の囲いの中で守られ、育ちます。その後、人々は門であるキリストを通過して、罪が赦され、命が分与されて、牧場の豊富な享受に入ることができます。しかし多くの人はキリストを受け入れないので、門がありません。その結果、文化や宗教の中に留まり続けることを強要されています(ただし、このことは文化のあらゆる面が間違っているということではありません)。実は多くの日本人、特に若者たちは日本の文化の固定観念や形式主義が嫌になっていきます。しかし彼らには出口がないので、批判しながらもその中に留まらざるを得ません。例えば 2015 年 12 月に起きた電通の東大卒業の若い社員が自殺した事件では、日本の文化の「効率を無視し、根性論を主張する」ことによる異常な残業や、休日出勤が原因でした。残業しすぎると効率を極端に悪化させます。しかし日本人は効率が悪化しても、そのことを考慮せず、残業によって埋め合わせをしようとする。若者はこのような合理的でない考えを軽蔑していますが、その中から抜け出す道がありません。

しかし主に感謝します。人が主を信じると、その人は牧者と門を持ち、人の文化や宗教の領域から神聖な命(ゾーエの命)の豊富な享受の領域に移ることができます。あなたは後見人である文化、一時的にしか役に立たない文化の中に留まり続けたいでしょうか。それとも文化の中で保護された後、緑の牧場の新鮮な豊富な享受の中に入りたいでしょうか。キリストはすでに十字架で死に、三日後に死からよみがえりました。それは彼が囲いの門となり、あなたを緑の牧場の享受にもたらすためです。キリストは良い牧者であり、囲いの門であり、緑の牧場です。牧者と緑の牧場の素晴らしい享受について、次の詩歌を読み、歌ってください。

The Lord's my Shepherd, I'll not want

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want;
He makes me down to lie
In pastures green; He leadeth me
The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again,
And me to walk doth make
Within the paths of righteousness,
E'en for His own name's sake.
5. Goodness and mercy all my life
Shall surely follow me,
And in God's house forevermore
My dwelling-place shall be.

16 節に一つの群れ、一人の牧者があります。さまざまな国の人々はそれぞれの文化の中で育てられました。もし彼らが自分の文化から出て命の牧養の下での享受の中に入らなければ、人々は一つの群れになることはできません。文化の違いが衝突を生むからです。